

昔むかし、王さまの御殿ごてんのとなりに、ひとりのおばあさんが住んでいました。おばあさんには、美しい孫娘まごむすめがありました。名前をテレジーナといいました。テレジーナは、毎日庭に出て、刺繡ししゅうをしたり、花の世話をしたりしていました。

あるとき、王子さまが、御殿まじの窓からテレジーナを見つけました。王子さまは、いいました。

「美しいテレジーナ

あなたのすみれの葉は、何枚なんまい？」

テレジーナは、恥ずかしがって逃げ出しました。そして、おばあさんにいいました。

「おばあさん、王子さまが窓から顔を出して、こんなことをいったの。

美しいテレジーナ

あなたのすみれの葉は何枚？

わたしはなんていえばよかったの？」

おばあさんは、教えてやりました。

「今度同じことをいつてきたら、こういっておやり。

気高い騎士けだか きしさん、

空には星がいくつある？

海には魚が何匹いるの？」

あくる日、テレジーナが庭にいますと、また王子さまが窓から顔を出していいました。

「美しいテレジーナ、

あなたのすみれの葉は何枚？」

テレジーナはいいました。

「気高い騎士さん、

空には星がいくつある？

海には魚が何匹いるの？」

王子さまは、何と答えていいかわからず、腹を立てて逃げ出しました。

「ぼくのいったことに答えないで、聞き返してきた。見てろ、こっちにも考えがある」

テレジーナは、おばあさんにいいました。

「おばあさん、今度は王子さまが逃げて行ったわ」

「そうだろ。ばあさんというものは、半分魔女みたいなもんだから、何でも知ってるんだよ。王子さまは、きつとまた何かいつてくるよ」

あくる日、王子さまは、魚屋に化けて、テレジーナの家の前にやってきました。

「魚はいらんかね？」

「おばあさん、魚屋が来たわ。買う？」

「そうだね、買いますよう」

テレジーナはおばあさんにお金をもらって、魚を買いに出ました。

「魚をくださいな」

魚を受け取ると、テレジーナはききました。

「おいくら？」

「お金はいらないよ」と、魚屋は答えました。

「どうして？」

「キスがほしい」

テレジーナは、あまり考えないで、魚屋にキスしました。そのとたん、魚屋は魚を取り返して逃げて行ってしまいました。テレジーナは、泣いて家に入りました。

「おばあさん、魚屋がお金はいらない、キスが欲しいっていうから、キスしてやったの。そしたら、魚をくれないで逃げて行ったの」

「ぼかだね、おまえは。キスなんかしてやっちゃだめだよ。お金はいらないっていう者には、何もやらなくていいんだよ」

あくる日、テレジーナが庭にいますと、王子さまが窓から顔を出していました。

「美しいテレジーナ、

あなたのすみれの葉は何枚？」

テレジーナはいいました。

「気高い騎士さん、

空には星がいくつある？

海には魚が何匹いるの？」

すると、王子さまはいいました。

「あなたはその口でキスしたね。」

それでも魚はもらえなかった」

テレジーナは、おばあさんのところにかけて行っていいました。

「おばあさん、あの魚屋は王子さまだったのよ！」

「そうかい、それじゃ、考えてみなくちゃね。あのかたはいいかただけど、おまえをそんなふうにからかっちゃいけないよ」

おばあさんは、テレジーナを馬の調教師ちようきようしに化ばけさせました。そして、純金のベルトをしめさせて、ラバに乗せました。テレジーナは、おばあさんにいわれたとおり、御殿の前でいいました。

「このラバのおしりにキスしたものは、純金のベルトをあげよう」

王子さまが、御殿から出てきて、

「そのすばらしいベルトをもらうよ」といって、ラバのおしりにキスしました。テレジーナは、ベルトを渡さないで、ラバにむちを打って逃げました。

「ひどいやつだ！」と、王子さまは叫さけびました。

テレジーナは、家に帰っていいました。

「おばあさん、してやったわ！」

「ああ、よかったね。もしかたからかってきたら、ベルトのことをいっておやり」

あくる日、テレジーナが庭にいますと、王子さまが顔を出しました。

「美しいテレジーナ、

あなたのすみれの葉は何枚？」

「気高い騎士さん、

空には星がいくつある？」

海には魚が何匹いるの？」

「あなたはその口でキスしたね。

それでも魚はもらえなかった」

テレジーナは、いいました。

「あなたもラバのおしりにキスしたわ。

それでもベルトはもらえなかった」

「ちくしよう、よくもやってくれたな。かならず仕返ししてやるぞ」

あくる日、王子さまは、テレジーナの家のかぎを盗みました。そして、夜になると、

悪魔あくまのかっこうをしてやって来て、戸をたたきました。テレジーナが目を覚ましていました。

「どなた？」

「おれは悪魔だ」

「何のご用？」

「おれといっしょに来るんだ」

「おばあさん、おばあさん。悪魔が連れに来たの！」

王子さまは、戸を開けて入ってくると、テレジーナの腕をつかみました。

「おばあさん、悪魔がわたしを連れて行く！」

そのとき、おばあさんが飛び起きました。王子さまは戸をあけっぱなしにして逃げてきました。おばあさんが来てみると、だれもいませんでした。

「悪魔なんていないよ。おまえ、夢を見たんだよ」

「でも、いたのよ。わたしを連れて行こうとしたの」

「どうかしているよ。悪魔なんているわけがない。夢を見たんですよ」

おばあさんは、なぐさめました。テレジーナは、恐ろしくて、もうその晩は眠れませんでした。

あくる日、テレジーナが庭にいと、王子さまが顔を出しました。

「美しいテレジーナ、

あなたのすみれの葉は何枚？」

「気高い騎士さん、

空には星がいくつある？」

海には魚が何匹いるの？」

「あなたはその口でキスしたね。

それでも魚はもらえなかった」

「あなたもラバのおしりにキスしたわ。

それでもベルトはもらえなかった」

王子さまはいいました。

「あなたはさげんだ。』おばあさん、

悪魔がわたしを連れて行く』」

テレジーナは、おばあさんのところにかけて行っていいました。

「おばあさん、夢なんかじゃなかった。王子さまだったのよ」

「なんだって。そんなことまでしたのかね。それじゃ、何とか考えなくちゃ。これで終わりにしてやるうじゃないか」

おばあさんは、半分魔女みたいなものだったから、御殿の裏口のかぎをうまく盗み出しました。そして、テレジーナに白いマントを着せて、ランタンと鎌かまを持たせて、死神に化けさせました。

「しっかり恐がらせておやり。そうすりゃ、もううるさくしないだろう」

夜になると、テレジーナは、御殿の裏口うしろぐちから忍びこんで、王子さまの部屋の戸を開けました。

「だれだ？」

「わたしは死神だ」

「何の用だ？」

「わたしといっしょに来るんだ」

「死にたくない。ぼくはまだ若いんだ」

「ついて来い」

「明日の朝まで待ってくれ。美しいテレジーナにまた会いたいんだ！」

王子さまが大声をあげたので、御殿じゅうの人がかけつけました。けれども、テレジーナは逃げ出し、部屋にはもうだれもいませんでした。

「死神がぼくを連れて行こうとしたんだ」と王子さまがいうと、みんなは、

「夢を見たんですよ。しょうがないですねえ、しっかりしなさいよ。連れて行かれたりしませんよ」といいました。けれども、王子さまは恐ろしくて、もうその晩は眠れませんでした。

あくる日、テレジーナが庭にいと、王子さまが顔を出しました。

「美しいテレジーナ、

あなたのすみれの葉は何枚？」

「気高い騎士さん、

空には星がいくつある？

海には魚が何匹いるの？」

「あなたはその口でキスしたね。」

それでも魚はもらえなかった」

「あなたもラバのおしりにキスしたわ。」

それでもベルトはもらえなかった」

「あなたはさげんだ。『おばあさん、

悪魔がわたしを連れて行く』」

テレジーナはいいました。

「あなたもさげんだ。『明日の朝まで待って。』

美しいテレジーナにまた会いたい』」

王子さまは、テレジーナの家にやってきて、いいました。

「これで、ぼくがあなたを好きだということが、ばれてしまった。ねえ、結婚しよう」

「そうね。結婚しましょう」

結婚式の前の晩、おばあさんがテレジーナにいいました。

「王子さまはあんなに腹を立ててたんだもの。おまえのことを好きだからといって、どんな仕返しがあるかわからないよ」

おばあさんは、テレジーナにそっくりのろう人形をこしらえました。

結婚式のあと、すばらしいお祝いの会が開かれました。そろそろお開きになるころ、

テレジーナは、王子さまに、いいました。

「とつてもくたびれたから、先に休みたいの」

テレジーナが寝室に行くと、おばあさんが、テレジーナのベッドにろう人形を寝かせました。そして、テレジーナにいいました。

「おまえは、ドアの陰に隠れているんだよ。そうすれば、王子さまがひどいことをなすつても、すぐに逃げられるからね」

しばらくすると、王子さまが、ナイフを持って寝室にやって来ました。花嫁は、ベッドで寝ていました。王子さまは、

「ずいぶんひどいことを、いろいろやってくれたな！」といって、ナイフを花嫁の首につきつけました。ナイフの先が触れたとたん、首から血が出ました。じつは、おばあさんが、ろう人形の中に赤いインクをしこんでおいたのです。王子さまはさげびました。

「ああ、どうしよう！殺すつもりはなかったのに！好きだったんだ。でもあんまりひど

いことをしたから、ちょっと冗談じょうだんのつもりだったんだ。殺すつもりはなかったんだ！あ  
あ、こうなったら、もう、ぼくは窓から身を投げてしまおう！」

王子さまは、窓を開けました。そのとき、テレジーナが、ドアの陰から出てきていい  
ました。

「やめて！窓から飛び降りないで！わたしはここにいるわ！」

わたしは指を切る 約束やくそくする

わたしのおはなしは もう長くはない

葉っぱは広く 道はせまい、

死んでなければ生きています

村上郁再話

資料『イタリアの昔話』 剣持弘子編訳／三弥井書店